

バッグは女性の「分身」?

映画「ライラの冒険 黄金の羅針盤を何の予備知識もなく見た。このパラレルワールドでは、お約束として、人間のそばにいつも動物や虫がいる。ダイモンと呼ばれるもので、人の心の奥底にある魂が目に見える形として肉体の外に出てきた、一種の分身らしい。

最初は戸惑ったものの、ニコール・キッドマンにくっついていれる金色に妖しく輝くサルや、ダニエル・クレイグと共にいる勇敢なヒョウを眺めるうちに、この動物の行動を人の心の動きとして読む、という見方にすっかりなじんできました。

映画館を出て六本木周辺を歩い

ていると、女性が手にしているバッグが、ダイモンに見えてきた。編集者風女子のマーク・ジェイコブス、和服女性が合わせていたエルメスのケリー、パンツスタイルの巻き髪OLのスタッズつきフランクチェスコ・ピアシア、ギャルメークの女の子が隣の男子に持たせるデニムのルイ・ヴィトン、学生風の女の子のエコバッグ……。バッグにその女性の一部が読めるような錯覚をおぼえる。

そういえば昨秋、英国のジャーナリストが出版した本に、エリザベス女王とハンドバッグとの関係が書かれていた(What's in the

Queen's Handbag)。肌身離

中野香織の——コロモのココロ

さずハンドバッグを持ち歩く女王のバッグが食卓にのれば「5分以内に終了せよ」、床にあれば「会話がつまらない、誰か助けよ」の合図となるのだとか。女王の分身のような存在にしてその心がバッグの動きから読める。このバッグもやはり女王のダイモンと見立てたくなる。

ダイモンと切り離された人が完全ではなくなってしまうように、バッグなしの女性は装いにおいて不完全に見えてしまう。たかがバッグが必需品となり、そこに意味が派生するのは妙なことだが、まあひょっとしたら、この世界だって「ものいうバッグ」をお約束ごととするパラレルワールドのひとつかもしれない……。

(服飾史家)